

人格質問紙による地域的パーソナリティの一計測

菊池 哲彦

序

地域的パーソナリティ又は地域的人格像という概念は、歴史や文化も含めて、そこで営まれる人の生活に他と区別されるところの、あるまとまった特徴ある様式が、多少変化することはあっても、相当長期にわたってみとめられるような、換言すれば、文化的、社会的特質の様な地理学的領域が存在するとき、そこで人の行動様式に、他の地域と区別される特徴が認められる場合に、その行動様式を総称するために用いられる。典型的には、この概念はその地域では最も平均的、最頻的行動特徴であって、しかも他の地域とくらべて特異な行動様式をさす。

ただし、文化人類学あるいは社会心理学では上記のような行動様式、具体的には生活様式から、さらにそうした生活を営ませる根元的な精神構造を抽象して、その地域の特異性を総括することも多い。この場合には、地域文化と地域住民の人格像との区別が明瞭でないこともある。これは結局、地域の *mode of total life* をまず追求し、そこで人の営みのいわば *Motif* を採り出すという方法の限界であるかもしれない。筆者がここでべたいことがらは、文化人類学で地域的人格という場合、心理学的に定義されている人格だけが問題になっているのではなく、むしろ、価値指向的な、文化的な行動の典例が志向されていることがあるということである。たしかに人格は文化と無縁ではない。人格の中核的部分は文化の個人に内在する姿であると考えられる心理学者は少なくない⁽¹⁾。しかし、そうであることが正しいという証明のためには、文化と人格の独立した測定を必要とするであろう。

文化人類学における地域的パーソナリティの研究においても、地域住民、特に原始民族または原住民の心理学的計測は早くから要求されていた。原始民族の実験心理学的測定は1881年英国測量艦の軍医 H. Guppy が人類学的観察に際して併用したのを嚆矢とするといわれる⁽²⁾。つづいて、1898年ケンブリッジ人類学調査隊によってトレス海峡地方民族の実験心理学的研究が行なわれる。原住民の性格、気質などの測定のためには、実験的方法ばかりでなく、さらに質的側面の検討が必要であるが、原始民族についての研究では、言語を用いず、また文化的規定性の少ない方法がのぞましい。M. Mead はマヌス族のアニミズム的思考を検討するため自作のインクプロットを用いた⁽³⁾。描画法も好んで用いられたが、Rorschach test は無意味図形についての印象をのべさせるという手続によって人格の構造・力動にせまる。この手続が上記の要求に合致するため、このテストはその普及とともに、この領域でも使用する研究者が増えている⁽⁴⁾。

しかし、文字をもつ民族については、文字を用いた検査も、当然、研究に導入されている。とくに同一語圏内での下位地域における人格あるいは社会的態度の差異の研究には、

量的処理が容易で大量のサンプルを比較の手がにえられるために質問紙による研究が圧倒的に多い。筆者も人格質問紙を用いて地域的人格を検討してみた。

1. 問題点の整理

アメリカの代表的な人格診断目録の一つである MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory)⁽⁵⁾ を標準化する過程で、阿部と黒田はアメリカ合衆国での標準得点を用いて日本人を評価すると抑うつ性尺度の得点が高くなることをみた。また佐藤によっても日本人の場合には男女とも抑うつ尺度得点が高いという結果がえられている⁽⁶⁾。

また、大脇、菊池、石井は、R. B. Cattell らの HSPQ 人格質問紙(高校生用)⁽⁷⁾ を仙台市内の高校生の標本に施行してみたところ、粗点の比較ではアメリカ合衆国の高校生に比し、男女とも集団従属というよりは自己充足的(孤立的)で、自信に欠け、罰についての意識が過剰であって、気むづかしい傾向を示した。また、日本の女子高校生では上記特性のほかに批判反撥をせずに甘受する傾向もみられた⁽⁸⁾。

北村と菊池は、H. J. Eysenck の MPI⁽⁹⁾ を翻訳し本邦のさまざまな標本に実施した。そのうち1960年までのデータを英国および米国のデータと比較した表が第1表である。これによると、内向・外向尺度(E尺度)では可能な最高得点が48点であるが、英国看護学生(女子)を除き、すべての正常な英米サンプルは25点以上である。一方、日本の学生群は24点以下となっている。また、神経症尺度(N尺度)については(可能最高得点48点)逆に英米正常サンプルの得点は24点以下である。それにもかかわらず、特に日本の女子大学生は米国の神経症患者と同じ位の値を示している。そして、英国のヒステリー患者と精神病質者群にくらべると日本の男女学生は、神経症傾向得点が高い。このことだけみると日本の少なくとも学生は、内向的で神経症的のようである。(E高得点低=内向、N高得点=神経症的。)外国でも神経症の場合、内向的でN得点が高くなる⁽¹⁰⁾。

日本の学生群の内向化と神経症化はある程度確からしいように思われる。また、MMPIは成人に実施したものであるが、これとHSPQの結果などから推定される人格像、すなわち、内向的で神経質、気むづかしくて抑うつのという人格像は、はたして、特殊な少数の例についてのみ言えることがらであろうか。

上記の資料が一般性をもつか否かを検討するためには、できるだけ大量の、組織的に抽出された標本について検討すればそれで済む。筆者は一応日本人の場合その生育のプロセスにおいて英米人よりも内向化し、神経症化する時期があるという作業仮説をここでたてることにしたい。その傾向が最も強くなる時期が20才前後であるとすれば、中学生は高校生より、高校生は大学生より、外向的にかつ神経症的でない筈である。そこで中学生の資料について若干検討する。

2. 茨城県稲敷郡桜川村浮島中学校の場合

対象として浮島中学をえらんだことについてはいくつかの理由がある。まず第一に、浮島部落は現在では干拓によって霞ヶ浦西岸の旧古渡村と陸つづきになったが、昭和10年に干拓が完成するまでは霞ヶ浦に浮ぶ唯一の陸島であったこと、そのため比較的狭い閉鎖的な土地に濃い血族関係の集落が発達し、一つの特色ある地域を形成してきたこと(附図1および2参照)、また、そのような地域であるため、茨城大学文理学部心理学研究室では

Table 1. Means, Standard Deviations, Reliabilities & Inter-correlations of the Extraversion and Neuroticism Scales of the Maudsley Personality Inventory

Sample	N	E-Scale		N-Scale		r _{EN}	Reliability		Investigator
		Mean	SD	Mean	SD		E	N	
Normal adult □	200	24.62	10.04	17.81	11.32	-.15	.81	.90	Eysenck, H. J. 1956. Revista di Psychol. Eysenck, 1956. Star, K. H. 1957. Lond. U. Dr. Theses
Normal adult ○	200	25.17	9.33	19.45	11.02	-.04	.82	.87	
Total	400	24.89	9.67	18.63	11.19	-.09	.83	.88	
English Univ. St. □	50	28.86	8.36	19.04	11.24	.12			
English Univ. St. ○	213	25.26	8.85	23.23	11.27	-.07			
Amer. U. Student □	714	28.40	8.06	20.19	10.71				Bendig, A. W. 1957. Psy. Reports J. consult. Psy.
American Univ. St. ○	350	29.41	8.37	21.63	10.45				
Amer. Univ. St. Mixed	145	27.77	7.60	21.57	9.75	-.20	.74	.84	
Japanese Women College Students ○	174	23.93	5.53	31.87	7.86	-.17			Kikuchi, T. Unpublished 1959.
Japan. Techniq. Coll. Students ○	60	21.28		29.27					
Japan. nurse Stud. ○	14	21.64		22.07					
English Stud. nurse ○	22	23.82	9.71	30.64	9.22				Treadwell, E. 1958
Amer. Neurotic Pat. □	83	19.09	10.33	32.98	10.78				Jensen, A. R. 1958. Acta Psychologica.
Amer. Neur. Patients □	65	18.67	9.21	34.75	11.83				
Total	148	18.91	9.86	33.75	11.29	-.30			
English Dysthymics	25	21.00	11.96	36.80	10.48				Siegel, J. J., Star K. H. & Franks, C. M. 1958. J. abnorm. soc. Psy.
Eng. Hysterics & Psychopathies	27	25.22	9.96	28.82	12.76				

Means of Lie Scale Score in Japan.

Women Coll. Techniques Coll. Stud. nurse

5.62(SD=2.81)

5.26

5.86

N. B. □ : Male ○ : Female

昭和33年に文化人類学的傾向の強い調査⁽¹²⁾を、昭和41年に社会心理学的方法を加味した調査⁽¹³⁾を実施し、筆者もあとの調査に参加して地域の特殊性を生活実態の面から解析した経験があることなどの理由によるが、昭和42年に補充調査⁽⁴¹⁾を実施することになったので、その機会を利用して MPI による測定を試みた。

2-1 浮島の地域性

浮島中学校における MPI の結果を記述するまえに、この地域の特殊性について若干のべておきたい。

昭和33年に大宮は⁽¹²⁾、俗信に対する消極的態度又は無関心が一般的であることは、他の農村とかわらない。これは主漁従農から主農従漁の生活に変わってから相当の年月を経過していることを意味する。しかし、俗信に対する否定的な態度はなく、生活への対応は積極性に欠けることを記述した。また、ここでは参加資格がはっきり定められた講が主なものだけで五指を屈し、その内容がリクリエーションであることに注目する。その講はいわば横の結合であるが、それは、「260」間の渡しによって対岸とわずかに交渉をもった時代には「急病人でもあれば、二人船頭で医者を迎えに行かなければならない」といった離島の生活は相互扶助を強く必要とし、それが娯楽の少ないことと関連して、講を発達させることになったと彼は説明する。しかし、講によって解消される対話は、現状肯定的な結末に終り、ここでも消極的生活態度が見られるという。

木本は⁽¹²⁾敬語の用法を調査して、敬語についての知識は他地区と変らないと考えてよい資料がえられたにもかかわらず、日常場面での用例が乏しいことを見た。これを相手別場面別で敬語の用法がどうであるかをしらべた結果、「浮島の場合の特色としては、相手や場面の親疎の度合い、いいかえれば同類意識、同質意識の有無ということが、その敬語行動を大きく左右するようで、社会的階層に関する意識は他の地域に比べて弱いように思われる。つまり、いわゆる社会的階層に対応する心理的ヘラルキーが、他の地域社会におけるほど分化発達していないように思われる。」と結論して、この地域の縦社会関係の弱さに言及する。同時に家族関係のよび名を調査して、その結果から、「長男に対して次男以下や姉妹たちが幼少の時からすでに『ウンツァー』『オーバー』と呼ばれ、やがては家を出て、その家の叔父となり叔伯母となるべき身分関係の固定した呼び名を荷わされていることは、ユーモラスな面もあるが、如何にも根強い家族的な伝統と、それに伴う封建的意識や保守性を象徴するもののように思えるのである。」と結論する。また本来は、対人関係指示語においても、相手が目上でも目下でもすべて、一人称は「オレ」であり、対話者が上位者であるとき、家族関係の呼び名（トーチャンなど）でよぶ以外は二人称でもすべて「オメー」であるなど極めて未分化である事実は、「島内ことごとく親戚に近いような状態であったとすれば、特に階層的意識が発達する理由もなかった」ことの反映と解されるとする。

海野(白幡)は、「浮島にあっては、社会の縦の関係は、主として婚姻による、血縁、親戚関係において代表され……地主—小作関係、本家分家関係……などにみられるいわゆる支配—従属関係は顕著ではない。」とし、「横の結合関係としてみられるのが組組織である。村内の各部落ごとに5軒程度が一組となって組織する組で……軒なみにくむ場合と、離れているものと組む場合がある。」この組が講など部落の冠婚葬祭などの行事の中心となる。この組の関係は日常生活においても規定性を発揮し、「このつきあいを人なみにはたすことが、この社会に住む人々にひとしく期待されるのである。」しかし、結局ここで期待されているのは義理なのであり、金を借りるなど実際たよりにするのは遠い親戚であって、近い他人ではない。海野(白幡)は組の拘束力に注目する。しかし、浮島住民のパーソナリティの特質はやはり消極性にあるのであり、それは「一応の安定」した生活に由来する。労働もそれがえられたところで打ち切られ、労働の成果も、現状の満足を与えてくれるもの——講などの社会組織も含めて——に投入されてしまう。大人の無目的は子供にも反映され、子供に目標を与えることがなく、都会へ出た子供も1、2年のうちに半数以

上が帰郷する。親たちは無原則にうけ入れてしまう。要するに多くをのぞまぬ満足感からくる一種の楽天性、おだやかさ、妥協性が浮島パーソナリティの基礎にあると海野(白幡)は言う。

さて、それから8年をへた浮島、そして浮島の中学生はどうであったろうか。

昭和40年12月1日現在、戸数457、人口、男 1,029、女 1,154、計 2,183。昭和33年7月1日現在戸数459、人口、男 1,155、女 1,302、計 2,457、人口にしてこの8年間に約13%の減である。以下昭和41年の浮島の生活の実体を略記してみよう。世帯の年令構造は茨城県下の農村としては普通で、3世代以上の重世代世帯が58%である。ほとんどが農業世帯で、農業収入をあげるにたる農地をもたぬごく少数の世帯でも、小作賃労、自家菜園などの形で農耕を行なっている場合が多く、農作業はほとんどの世帯で生活に浸透しているといつてよい。

農業の形態は、所有耕地の平均は田88a、畑30aで、米中心であり、畑は麦中心である。けれども、昭和31年にはこの形が361戸中335戸あったものが昭和41年には318戸に減少して、わずかながら他の形態がふえている。また兼業はさらに増加し、昭和25年から40年にかけて、専業農家は半数以下に、第1種兼業農家は5倍、第2種兼業農家は2倍になった。これは若年層の離農と壮年層の現金収入を農業以外に求める傾向によるが、このことは、農業労働力の補充を現金によって行なう傾向と平行している。昭和39年度「ゆい」は266戸で行ない延4,664人が手間を交換したが、139戸で臨時雇をやとい、延人数は3,805人に達した。手間をはらう手伝は130戸で受け、延人数は1,110人であった。農作業の単位の請負いも増加し、営農における現金又は資金の重みは今後増加すると思われる。それにもかかわらず、営農形態はほとんど固定し、換金ルートも変化していないといつてよい。

一方、漁業世帯は、昭和22年に100戸、25年に20戸、30年には5戸と激減した。昭和26年には漁業組合員は50名であったが、専業者はわずかに3名である。33年には兼業漁家のうち廃休業にひとしきもの10名、専業者はわずかに1名であった。

以上からかなり典型的な農村というイメージがうかび上る。さてその営農の保守性にもかかわらず、農用機械の普及度はかなり高い。これは家電関係、家の造作、台所改善などについても一様にみとめられる。このことを菊池は消費面において緊張を有する文化型と要約する。

「比較的狭い閉鎖的な土地に、濃い血族関係の集落が生活しているとき、相互の信頼と協力は競争や反目と一体となって成長する。協力も競争も生産面に関しては限定された土地の媒介するところであるから、とくに競争は家屋の修築、冠婚葬祭などの消費面に顕在化しやすい。一方、血族的上下関係は時代とともに財産、門地をも含めた社会的評価を発展させるが、根底に同族意識を基礎として有するため、本家をあらそい、家柄の古さを証明するために他家の墓標を盗み、他家の失敗を喜び、といった文化的・社会的面での抗争を現出させる。この抗争は水準化と呼びうるものであるが、これが消費面での競争を激化させるのは当然である。」(菊池⁽¹³⁾) こうして爆発的な器具の普及が起りうる。

消費面における緊張とうらはらに、生産面における保守性はおそらく風土にもとめうるであろう。

「浜田のかかげる資料によると昭和27、8、9年の三ヶ年の平均気温は、3～5月13.3度、6～8月23.7度、9～11月15.8度、12～2月3.1度、年平均14.03度であり、また年

間平均降雨量は1512.4ミリで温暖な気候に恵まれていることが知られる。大湖中の一島嶼ではあったが、最近30年は洪水に悩まされることも比較的少なく、地味肥沃、漁場また豊饒、また養蚕に適し、……この自然が農耕漁労を生活そのものと感ぜしめ、この作業、この風土に深く信頼し依存する精神構造を築かせたのはむしろ当然である。というよりも、農業の経営は生活そのものとなっていると表現すべきであろう。こうして生産や生活にたいする楽天性、消極性は、消費における意欲や競争と興味深く対立共存しているのである。

注意すべきことは現在の農業経営と風土とは往古におけるほど直接的関係はないということである。むしろ現時点では、……現経営の踏襲を強要する社会的経済的要因があるのであり、それが慣行的思考法と接合して、うえの保守的行動を生むのであると考えた方がよい。」(菊池⁽¹³⁾)

約半数の家庭では定期購読雑誌をもっていない。定期購読雑誌は過半数が「家の光」である。TVの定期視聴番組の74%は娯楽番組で、スポーツと合せると80%になる。

本家分家関係は稀薄で、本家も分家もあるという家は10.7%、その連鎖は3～4戸以内の小さなもので、古くから発達していた部落でも当家が本家だが分家がないというパーセンテージが高い。

講もその性格は不分明になった。参加資格の明瞭な講もいく分は残っていたが、リサンコ(遊山講)が圧倒的に優位で、これは、団体旅行に代表される不特定個人自由参加の娯楽が目的の講である。そこには組の拘束力はない。しかし、老人の講は崩れていないし、十九夜講、六夜講、二十四日まち、庚申講も弱体化はしているが、その性格はわりあい崩れていない。

諸社会関係はこうして次第に稀薄に、次第に個人本位に変わろうとしている。けれども桜川村の村長選、村議選では美事な結束を示し、村長はじめ、村会議長や有力議員を数多く送り出すなど、社会関係における地縁的、血縁的結合力は意識の基底においてなお生きているというべきである。

木本⁽¹³⁾は農業経営における課題意識、対策、将来への展望、農業に対する評価、生活感情などを検討して、「浮島の人たちの世間態を極度に気にし、見栄を張る伝統的な傾向の情勢の中で、合理的な思考の芽が伸びなやみ、広い視野に立つ団結、協調の精神を必要とする農業経営近代化の課題が、狭量な利己心の強い抵抗にあって、その解決を阻まれているように思えるのに、この根本問題についての課題意識とその対策が、いかにも弱いという感じをもつのである。」となげき、この検討の結果を次のように要約する。

「浮島の人達は、大多数が、主にその厚い人情に基づく親和的人間関係を指摘して、さらには温和な自然的環境をあげて、浮島を住みよい処と感じている。しかし、その反面には、人間関係が濃密であるが故に、その社会生活の中で秩序を与える役割を果たしてきたとも考えられる『義理づきあい』の煩瑣な慣習に拘束されて、住みにくさにもつながっている。」以下略。講や組は弱体化しても、主要行事にのこる義理に代表される固定的人間関係、また、親しすぎる人間関係は社会行動の規定力として依然働いているといえるのであろう。

さて、それではわれわれがこれから検討しようとしている中学生達は上記のような地域でどんな生活をしているのであろうか。

白幡^(13,14)によると、午前7時前後に起床、登校まえに朝食をとりながらテレビを見、学校へ行き下校後1—2時間遊び、帰宅してテレビ、夕食、さらにテレビをみて午後8時ごろから9時ごろにかけて勉強を開始し、9時ないし10時頃就寝というのが平均的な時間配分であるという。テレビの視聴延時間は1日3時間で、自宅での学習時間は1、2年で平均1.2時間、3年で1.5時間、進学希望者は74%であるが、彼らでも大体同様である。視聴率の高いテレビ番組は「青春とは何だ」ほか青少年の生活や心理、成長過程をあつかったものが上位五位までを占め、スパイもの、戦争・活劇も個々の番組としては低いが全体としてはかなり高い視聴率である。小遣いは月平均1,000円位で、使途は主として間食である。雑誌を定期的に購読しているものは20%にすぎない。

事実に関する設問に無答は少ないが、意向を問われると無答がにわかになくなる。大人になってしてみたいこと(43%)現在の不安・悩み(40%)大人への希望・意見(51%)農業の評価(74%)浮島の習俗の評価(よい点62%,改めるべき点47%)将来浮島に住む希望の有無(36%)といった数字である。

白幡はこれらの設問でえられた回答を整理し、「ここ7、8年間に進学を希望する者は急速にふえたが、「一般的風潮への反応の域を出ず、明確な目的意識は親たちも、当の子供たちにも甚だ稀薄である。」「それはまた同時に、自分が現在おかれている状況——家庭の職業、家族との人間関係等——について、必ずしも明確な認識がなく、」「ほとんどが農家の子弟でありながら、農業そのものについての意見や態度が不明確であること、自らの将来についても『夢』や『希望』の形ですら十分に語りえない」「態度の漠然さは」「将来への目的意識的な姿勢を欠いているからであるとみては不当であろうか。」と要約する。大人たちの生活は子供たちの日常にかなりよく投影されているようである。浮島の習慣風俗について、よい点としてあげたもののうち上位三項は人情味が厚い・親切で明るい、近所づきあいがよい、協力的なことであり、改めるべき点については、時間がルーズ・定刻を守らない、噂・かげ口・悪口、ことばづかいが荒いの三項が上位で、あとそれ以下は数人づつがあげている事項である。これは大人たちのあげている評価と全く同じといってよい。人間関係のわずらわしさは「中学生たちも日常経験で痛感しているのであろう。」

桜川中学校浮島分校は昭和43年4月に、桜川中学校に統合された。筆者は上記の調査後1年をへた昭和42年2月13日と昭和43年3月13日とに分校全生徒にMPIを実施した。対象者総数は42年169名、43年132名であった。

2-2 MPI 実施成績

昭和42年と43年に実施した結果は表2と3に示してある。大山正博が仙台市内の女子高校生258名でえた結果はE得点26.61、N得点30.33であった。それに比べるとNについては3年生の女子は大体同程度で男子は一般に低い。1年生の女子は高得点であるが、これは2年生になると(1968年)さらに高くなる。E得点は女子は大体高校生と同じ位であるが、男子は1年生でやや外向的、以後内向化する。

浮島中学の資料についてみると1967年の分についても1968年の分についても、学年間でN得点は一定の傾向の変化はみせないがE得点は男子の場合学年が進むにつれて内向化する傾向がある。標準偏差(SD)は一般にNよりE尺度で小さい。これは外国の結果でも同様である。自己評価が多様化するとSDは大となるが、浮島中学校でのSDは、筆者

Table 2. Mean Scores and SDs of MPI at Ukishima Middle School on Feb. 1967.

Grade		1st		2nd		3rd	
Sex		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		23	30	17	30	34	30
N	\bar{x}	29.13	30.50	25.47	27.10	26.00	30.80
	SD	3.79	4.91	3.41	4.14	4.37	3.88
E	\bar{x}	28.35	26.20	24.06	27.20	25.74	26.60
	SD	2.79	3.58	2.97	2.45	2.98	3.29

Table 3. Mean Scores and SDs of MPI at Ukishima Middle School on March 1968.

Grade		1st		2nd		3rd	
Sex		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		16	21	25	24	16	30
N	\bar{x}	25.81	29.43	30.56	34.00	27.31	31.70
	SD	3.51	3.56	3.46	3.81	2.59	4.29
E	\bar{x}	26.00	25.57	25.76	24.75	23.94	25.60
	SD	2.89	2.93	3.04	3.96	3.09	3.15

がえた女子大生の SD (E : 5.53, N : 7.86) よりかなり小さい。こころみに浮島中学校におけるそれぞれの尺度の最大の SD とこの女子学生における SD の差を F 検定してみると、E では $F=1.8796$: $P<0.05$, また、N では $F=3.2637$: $P<0.02$ で、一般に女子大生の分散が大といえる。筆者が別にくえた男女大学生 843 名では \bar{x} は $L=4.92$, $E=23.98$, $N=30.72$ で、SD は $L=7.67$, $E=8.05$, $N=8.26$ であった⁹⁾。しかし、中学校 3 学年間で有意差のあるような変化はないようである。ところで、1967 年に 1 年生だったものは 2 年生に、2 年生であったものは 3 年生に進級しているから、この一年間の変化をみることにする。その結果は表 4 と 5 に示してある。平均値の上では男女とも一様に内向化、神経症化の傾向を示す (N 高、E 低の傾向)。しかし、t 検定してみると、1 年から 2 年になった群では女子の神経症傾向が高くなったことと、男子の内向化、2 年から 3 年になった群については女子のみ高神経症傾向化、内向化が有意な t 値をえた。

しかし、臨床心理学的に考えると、すべての個人が、浮島中学校では進級と平行して、内向化したり、神経症傾向が強くなったりしたということは理窟に合わない。むしろ、内向的になったり、神経症的になる個人は、このころからその傾向が出て、多少そういう個人が目立つようにはなるが、まだ全体の SD を大きくするほどの増加はみせない。それは地域的に生活空間が限定されている集団であるからである。しかし、大学生の場合には、年齢による性格の多様化のほか、いろいろの地域の出身者が集まるので、得点分散は大きくなると考えることができる。

さて、大山の資料によると女子高校生は N については、大学生と同水準、E については

Table 4. Changes of Mean Scores and SDs of MPI during One Year in the Case of 1st Year Grade Class on Feb. 1967.

Sex		Male			Female		
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD
N	1967	23	29.13	3.79	30	30.50	4.91
	1968	25	30.56	3.46	24	34.60	3.81
		t=1.3169 N.S.			t=2.8141 p<0.01		
E	1967	23	28.35	2.79	30	26.20	3.57
	1968	25	25.76	3.04	24	24.75	3.96
		t=2.9980 p<0.005			t=1.386 NS		

Table 5. Changes of Mean Scores and SDs of MPI during One Year in the case of 2nd Year Grade Class on Feb. 1967.

		Male			Female		
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD
N	1967	17	25.47	27.31	30	27.10	4.14
	1968	16	27.31	2.59	30	31.70	4.29
		t=1.6835 N.S.			t=4.1498 p<0.005		
E	1967	17	24.06	2.97	30	27.20	2.45
	1968	16	23.94	3.09	30	25.60	3.15
		t=— N.S.			t=2.1594 p<0.05		

多少外向的であった。われわれの中学生群はNについては、女子はほぼ同水準、男子は低く、Eは少なくとも女子高校生と同程度にかそれ以上に外向的であった。

しかし、この地域の特殊性とこの成績とはどうかかわるのであろうか。このことを明らかにするためには、地域としての性質を明らかに異にする他の地域の検査成績と比較する必要がある。浮島の地域性が、比較的閉鎖的で、内部に濃密な人間関係を包蔵する点にあるとするならば、それとは対照的な、やはり保守的とはいえはるかに開放的で、行動的な漁村の中学生を検討した結果⁽¹⁵⁾と比較してみてもどうだろうか。

3. 茨城県那珂湊市平磯町を中心とする調査

この調査では自己評価を求める従来の形式(A形式)のほかに、その地域での一般的人格を問う形式(B形式)を用いた。すなわちA形式の質問文は、「あなたは……ですか。」であり、B形式のそれは、「ふつうの人は……ですか。」である。

この調査における結果の一つは、A形式の質問紙の平均、標準偏差などである。これは浮島中学校の資料と比較しうるものである。また別の一つは、AB両形式間の相関係数で

ある。地域との一体化が大であるほど係数は大となると考えることができる。

3-1 調査地の概略

調査地是那珂川の河口に面する漁港をもつ那珂湊市那珂湊地区、隣接してやはり漁港をもつ同市平磯町、漁港もあるけれども、農村といってよい同市阿字ヶ浦地区、那珂湊市に隣接する勝田市のうち水戸市に近く、社宅入居者の多い市毛地区、および純農村と考えられる勝田市馬渡地区を対象としてえらんだ。(附図1および3を参照)対象校是那珂湊中学校、平磯中学校、阿字ヶ浦中学校、勝田第2中学校(市毛)、馬渡(勝田第3)中学校の5校である。

那珂湊中学校は市街地からの通学生が多く家庭の職業も変化にとんでいる。小都市であるが、漁港と漁業および加工業関係者の子弟が比較的多いことは無視できない。平磯中学は漁船員、沿岸漁業者、漁業兼農家の子弟が多く、商店街は、一街道だけあるが、おおよそ漁村といってよい。平磯と那珂湊とは地域的には相互依存的、互助の関係にあって、どちらかという船主(網元)是那珂湊地区に多く、平磯は従属的ではあるが性格的には近いものがある。ただ、中学生についてみると、那珂湊はより都市的、平磯はより漁村的といえるであろう。那珂湊、平磯、阿字ヶ浦を総稱して三浜地方という。しかし、阿字ヶ浦の中学生は多く農家の子弟で漁業は下火である。この地区はむしろ海水浴場として売り出そうとしている。馬渡は阿字ヶ浦に隣接し、純粋の農村であったが、今は勝田市に合併されている。海岸線をもつが漁業はない。阿字ヶ浦、馬渡は従来是那珂湊商圈に属していたが、現在は勝田經由水戸に吸収されつつある。市毛はそれらより内陸にあり、水戸に近く風土的には、常陸太田、菅谷などに近い。ただ、戦前より日立製作所勝田工場があって、その堀口社宅に近いことと、国道6号線と、那珂湊から、常北町、水郡線各駅、および常陸太田方面へ通ずる街道の交叉点に位置していたため、戦前純農村であったときも交通は多かった。現在は大きな市毛団地があるため、中学生は勤労者の子弟が多い。

この地域については、浮島ほど濃密な調査を行っていない。この点は別の機会に補足される必要がある。資料としては両市教育委員会および各中学校での聴取と、検査対象者の属する学級の生徒家庭の調査がある。ここでは家庭の職業についての項のみを第6表に示す。ここでの実数は表7とことなる。表7では欠席者の数だけ少ない数字となっている。第6表によると、平磯中学の対象家庭143のうち52(36%)が持船のない漁夫で、小型の船をもつもの8、船員5、その他に含まれる船大工1をあわせると、漁業に直接関係する家庭は46%となる。阿字ヶ浦中学でも、漁夫10のほか、小型漁業2、船員1、兼業農家のうち漁業兼業の2を加えて15(12%)ほどの漁業関係者をみるが、平磯中学の3分の1にすぎない。阿字ヶ浦で最も多いのは農家で60%に達している。農村の色彩がこいといえる。那珂湊中学では、漁夫も阿字ヶ浦中学と同率程度あるが、大型船の船員の割合が増し、商業、公務員、会社員、工具、その他などの比率が大きくなる。三浜地区の中心都市地域の姿が浮び上る。その他の分類には、魚加工業、鉄工業、醸造業、医師、旅館、浴場などが含まれている。(失業、無職なども入っている。)

市毛(勝田二中)の資料は欠けている。しかし、日立製作所及び関連会社の社宅にすむ家族は対象116中33(28%)であった。もちろん、社宅にすまずにこれら会社に勤務する地元住民は相当数に上る。

馬渡地区では圧倒的に農家の数が多い。漁家はない。公務員、会社員もそれほど多くは

Table 6. Occupations of Subjects' Families

6-1 Hiraiso														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
	漁業	船員	漁夫	農業	兼業	農家内工業	商業	公務・会社員	大工左官	労務者	行商	工員	その他	
1st grade	5	2	15	3	—	3	4	4	4	—	2	2	5	49
2nd grade	2	3	16	2	—	3	4	5	1	1	2	1	7	47
3rd grade	1	—	21	5	—	4	6	3	3	—	1	2	1	47
Total	8	5	52	10	0	10	14	12	8	1	5	5	3	143
6-2 Azigaura														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
	漁業	船員	漁夫	農業	兼業	農家内工業	商業	公務・会社員	大工左官	労務者	行商	工員	その他	
1st grade	2	—	—	21	7	—	1	3	—	1	1	—	2	38
2nd grade	—	—	7	24	3	1	—	3	2	—	1	—	—	41
3rd grade	—	1	3	21	—	1	3	5	2	1	6	—	1	44
Total	2	1	10	66	10	2	4	11	4	2	8	0	3	123
6-3 Nakaminato														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
	漁業	船員	漁夫	農業	兼業	農家内工業	商業	公務・会社員	大工左官	労務者	行商	工員	その他	
1st Grade	—	—	3	6	1	1	13	9	2	3	1	3	8	50
2nd Grade	—	3	6	5	—	6	3	7	7	—	1	4	7	49
3rd Grade	1	3	4	10	1	5	5	7	—	—	1	4	12	53
Total	1	6	13	21	2	12	21	23	9	3	3	11	27	152
6-4 Mawatari														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
	漁業	船員	漁夫	農業	兼業	農家内工業	商業	公務・会社員	大工左官	労務者	行商	工員	その他	
1st Grade	—	—	—	28	4	—	1	8	1	—	—	—	5	47
2nd Grade	—	—	—	29	3	1	1	1	1	1	—	—	2	39
3rd Grade	—	—	—	39	3	—	2	5	—	—	—	—	4	53
Total	0	0	0	96	10	1	4	14	2	1	0	0	11	139

N.B. 1: fisherman having his small ship 2: sailor 3: hired fisherman 4: farmer 5: farmer having family member who is entertaining on other job. 6: domestic industry 7: merchant, shop keeper, tradesman 8: staff members engaged in business or official bussiness, member of a company, clerk or offic girl. 9: Carpenter or plasterer 10: free laborer 11: peddling 12: worker engaging in a company or a domestic industry which is kept by others. 13: others, that is medicin, brewer, prosses manufacturer, maker of wooden ship, hotel keeper, without profession, maid, or unemployed.

ない。農村とってよかろう。

しかし、この表は地域全体の資料にもとづいてはいない。また、その可能性は標本が小さいのできわめて少ないが、同一家庭の生徒が対象として複数入っているかもしれない。こうした制限はあるものの、この三浜地区とそれに隣接する地域の特殊性を概観する手がかりとはなるであろう。

3-2 MPI 実施成績

検査対象は各中学校の各学年から1学級づつえらんだ。全校を対象にするだけの余裕がなかったからであるが、そのために地域の特性なのかクラスの特性なのか曖昧になった点もある。しかし、あまり深く詮索するのではなければ粗大な比較にはたえると思われる。

検査の実施は、A形式実施1週間後にB形式を実施することにした。

Table 7. Mean Scores and SDs of MPI A Form in each School Sample.

7-1 Hiraiso

		1st		2nd		3rd	
		Male	Female	Male	Female	Male	Femal
n		25	23	21	23	23	23
N	\bar{x}	28.22	26.96	25.96	22.87	22.35	26.39
	SD	3.86	1.10	2.97	4.00	3.75	3.91
E	\bar{x}	25.88	26.26	26.00	25.61	25.35	28.48
	SD	3.19	2.78	2.18	2.93	4.04	4.05

7-2 Azigaura

		1st		2nd		3rd	
		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		20	19	21	20	23	19
N	\bar{x}	22.95	25.84	27.57	29.60	29.00	29.95
	SD	3.45	4.84	3.78	3.55	4.41	7.09
E	\bar{x}	27.65	25.53	24.43	24.95	21.83	27.11
	SD	2.84	3.06	3.02	3.27	3.77	2.75

7-3 Nakaminato

		1st		2nd		3rd	
		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		27	23	22	26	23	23
N	\bar{x}	26.44	23.91	24.50	21.27	26.17	20.26
	SD	4.34	3.01	4.46	3.40	4.24	4.09
E	\bar{x}	28.93	28.87	26.00	27.85	25.09	28.35
	SD	2.89	2.84	2.58	2.93	3.27	2.39

7-4 Ichige

		1st		2nd		3rd	
		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		20	17	21	17	21	20
N	\bar{x}	27.05	28.29	27.57	27.59	23.14	24.20
	SD	4.26	3.78	2.93	4.32	4.04	5.49
E	\bar{x}	26.30	31.94	28.43	28.12	25.29	27.95
	SD	2.99	3.17	2.49	1.92	3.07	3.50

7-5 Mawatari

		1st		2nd		3rd	
		Male	Female	Male	Female	Male	Female
n		21	26	15	23	18	25
N	\bar{x}	23.71	20.23	24.80	23.65	23.83	23.24
	SD	3.80	2.83	3.15	4.20	4.31	4.39
E	\bar{x}	28.57	27.85	28.60	28.74	25.17	25.64
	SD	2.65	2.21	2.81	4.04	2.88	3.06

3-2-1 MPI A 形式の結果

第7表はA形式の結果をまとめてみたものである。

第7表にみると、浮島とはかなりちがった形の成績を認めることができる。

まず、平磯ではNが全体としてひくく、男子では年齢とともに、浮島とは逆にNが低くなる。(1年-3年間 $t=5.2233$ $p<0.02$) また、女子でもNの値は低くなりこそすれ、高くなる形跡はない。Eは男子では変化にとぼしいが、女子は1年より3年で外向的となる。($t=2.1197$ $p<0.05$)

同じ傾向は那珂湊にもみとめられる。N得点は年齢とともに増加しない。そして浮島にくらべると全体として低く、特に女子がそうである。逆にEは全体として高い、特に女子がそうである。男子には年齢とともに内向化する傾向がみられる。市毛ではNは1年と3年の比較で男女とも有意に3年で低くなる。(男子 $t=3.0164$ $p<0.02$, 女子 $t=1.8562$ $p<0.05$) しかし、Eは女子で低くなる傾向がある。(1年-3年間。 $t=3.5090$ $p<0.005$)

さて、次にこの地区の農村部をみてみよう。馬渡では平磯と同様、浮島とくらべてNが全体として低い、しかし、男女ともわずかながら年齢に伴う内向化がみとめられる。(1年-3年間。男子 $t=3.88$ $p<0.005$, 女子 $t=2.91$ $p<0.01$) 一方、阿字ヶ浦ではNが年齢とともに増加する傾向がみとめられ(1年-3年間。男子 $t=4.8398$ $p<0.005$, 女子 $t=2.9033$ $p<0.01$) Eも男子にあっては内向化の傾向がみとめられる。(1年-3年。 $t=5.5164$ $p<0.005$)

神経症得点についていえば、平磯、那珂湊、馬渡は浮島より低い。ややなれた市毛で

は全体として低いとはいいがたいが、1年と3年では3年で低い。

次に外向点は平磯で低くならず、また全体としても低くない。那珂湊では全体として低くはないが、男子で内向化の傾向があり、市毛では女子に内向化の傾向がある。馬渡でも3年できがるが、全体の水準とにはそれほど低くない。

神経症傾向点が低く、年齢によって増加しない。外向点が全体として24点以上で、年齢とともに低下しないということ三浜地区の特徴とすれば、その典型は平磯に見出される。

反面、阿字ヶ浦は浮島と同じ傾向を示した。これは意外であったが、阿字ヶ浦を通過して北上する主要道はなく、那珂湊から入る道路の丁度終点にあたる。茨城交通株式会社の湊線も阿字ヶ浦が終点である。太平洋に面してはいるが地形的には、浮島が露ヶ浦に面してはいても他の地域から切りはなされていたと同じ状況におかれていたのかもしれない。この点についてはさらに検討する必要がある。

他の地区は、神経症傾向点については平磯に近い。馬渡は農村であるが、平磯に近い形になっている。こういうところから考えると、神経症傾向の年齢ともなって増加するという傾向は人格形成の場としての地域が閉鎖的であるということと関連があるのかもしれない。

もとより、浮島で不完全にこころみたように、経年的観察を行なう必要がある。

3-3-2 MPI B 形式の結果

まず、第8表にAB両形式の平均値と被験者数を示した。また、第9表には両形式間の相関係数(Spearman's r)が示してある。平磯については漁家の、市毛については日立製作所関係の社宅入居者の、馬渡では農家の子弟をそれぞれ別にして、尺度別、男女別に計算した相関係数を第10表に示した。那珂湊では商家の子弟だけを選ぶつもりもあったが実数が少なく、阿字ヶ浦も同様の理由でこの二校については男女計で計算した。

まず、B形式得点を検討する。

N尺度では、平磯、那珂湊、馬渡では3学年を通じてあまり変化がない。しかし、市毛ではひくくなり、阿字ヶ浦では高くなる。平磯、那珂湊、馬渡では女子の方が低く、市毛と阿字ヶ浦では男子が低い。

E尺度は各群とも学年差は明瞭なものではない。男女差も大きくないようである。

A形式点とB形式点との相関関係をみると、全体としてE尺度で大きな係数値が少ない。これは神経症傾向という特性を考えると、この特性の方がより社会的な色彩がつよいとはいえないだろうか。あるいは「ふつうの人」と自己との同一視の高い性格特性であるといってもよいのであるが。そうであれば、行為や態度の神経症的かいかの評価は、自己の投影としての、そしてその投影も含む外在の内面化としての内的規準にてらしてなされるところの社会的文化的判断としての色彩を内向性・外向性よりも強く帯びているといえるであろう。市毛では外向-内向に関する平均人の評価と自己評価の相関にかなり大きいマイナスの相関が二つもみられる。しかし、この群でも神経症傾向については安定した相関を示しており、とくに女子ではそうである。またさらに神経症傾向に関しては女子の相関の方が一貫して大である。しかし、内向・外向については、一定の傾向がみとめられない。このこともやはり神経症傾向の方が social standard がより明確であることを示す証左であるように思われる。(女子が社会規準により敏感でありかつ、その方向に自分

Table 8. Means of MPI Scales of A Form and B Form

8-1 Hiraiso

Scale \ Form		Grade				
		1st	2nd	3rd	Fi. Male	Fi. Female
N	A Form \bar{x}	27.75	25.12	25.11	28.58	25.38
	B Form \bar{x}	26.87	26.88	26.11	27.55	25.14
E	A Form \bar{x}	25.83	25.56	26.16	26.00	24.26
	B Form \bar{x}	28.00	28.21	26.89	27.50	27.36
n		45	34	37	24	31

N. B. Fi. means this classification contains only those belonging to the fisherman's family.

8-2 Nakaminato

Scale \ Form		Grade				
		1st	2nd	3rd	Male	Female
N	A Form \bar{x}	25.61	19.93	23.92	26.45	20.41
	B Form \bar{x}	25.62	26.47	25.17	26.28	22.98
E	A Form \bar{x}	29.19	27.31	26.99	27.08	28.71
	B Form \bar{x}	27.74	28.16	28.68	28.32	29.00
n		31	33	36	54	46

8-3 Azigaura

Scale \ Form		Grade				
		1st	2nd	3rd	Male	Female
N	A Form \bar{x}	27.59	28.33	28.81	27.20	27.26
	B Form \bar{x}	25.74	25.33	30.94	26.49	27.80
E	A Form \bar{x}	26.79	25.98	23.87	24.85	24.14
	B Form \bar{x}	28.75	26.63	27.16	27.31	28.84
n		34	40	31	55	50

N. B. Form A was the original MPI and Form B was modified in order to ask modal personality: the questions of Form B were printed as "Are (Do) they...?" insted of "Are (Do) you...?"

8-4 Ichige

Scale	Form	Grade			S. Male	S. Female
		1st	2nd	3rd		
N	A Form \bar{x}	28.55	28.78	23.04	27.07	25.85
	B Form \bar{x}	28.27	26.55	25.22	26.43	29.32
E	A Form \bar{x}	28.36	27.78	26.09	27.00	28.84
	B Form \bar{x}	29.91	28.22	28.45	27.07	26.79
n		33	27	32	14	19

N. B. S. means this classification contains only those belonging to the salaried man's family.

8-5 Mawatari

Scale	Form	Grade			Fa. Male	Fa. Female
		1st	2nd	3rd		
N	A Form \bar{x}	22.34	23.27	23.13	24.34	22.93
	B Form \bar{x}	22.34	25.47	23.62	24.76	23.84
E	A Form \bar{x}	28.54	29.88	24.86	26.62	28.02
	B Form \bar{x}	28.34	29.53	27.24	27.66	28.72
n		32	34	29	29	43

N. B. Fa. means this classification contains only those belonging to the salaried man's family.

Table 9 Correlation Coefficients between Form A and B. ⁽¹⁵⁾

School	Scale Grade	N			E		
		1	2	3	1	2	3
Hiraiso		0.476	0.584	0.259	0.065	0.329	0.034
Nakaminato		0.162	0.129	0.603	0.042	0.331	0.302
Azigaura		0.468	0.429	-0.021	0.029	0.395	0.001
Mawatari		0.343	0.412	0.480	0.221	0.605	0.235
Ichige		0.459	0.335	0.422	-0.645	-0.589	0.205

Table 10. Correlation Coefficients between Form A and B.

Group	Scale Sex	N		E	
		M	F	M	F
Hiraiso (Fi.)		0.258	0.346	0.535	0.260
Nakaminato		0.305	0.433	0.275	0.063
Azigaura		0.156	0.271	-0.282	0.315
Mawatari (Fa.)		0.097	0.441	0.548	0.126
Ichige (S.)		0.163	0.591	0.083	-0.250

N.B. Fi : Fisherman's family member only.

Fa : Farmer's family member only.

S : Salaried man's family member only.

をおこうとするということもあろうが、同時に女子の方がこの年齢層では早熟であり、そのために社会的形成も早いということがあろうと思う。上にのべたことはこのことと関連して考えられている。）

さらに興味のあることは平磯漁家の男性徒、那珂湊男生徒、馬渡農家の男生徒は、女生徒より、内向、外向に関しより大きな係数値を示している。ここでもこの三者の共通性がみられる。一方、阿字ヶ浦では、男生徒は逆相関を示し、女生徒はかなりの正の相関を示している。市毛では男子は無相関、女子は小さな逆相関を示す。

さて、N尺度のAB両形式間の相関係数を平磯、那珂湊、馬渡の三者について比較すると、馬渡の男子だけが相関を示さない。これは、馬渡の3年生が内向化することとも関連があろうが、それは措き、A形式とB形式の得点についてみると、上記三校の女子はABともに男子よりひくくなっている。男子が自己評価において社会的規準との同一視に相対的に乏しいとすれば、(すでにみたようにN尺度のAB両形式間の相関は女子の方が高い。)この地区の文化では、神経症傾向が低いのが常人だとされており、それにひかれて女子の自己評価ではNが低得点となっているのではなかろうか。ただ、平磯がもう少し低くてもよいと思われる。

那珂湊は外洋漁船の基地でもあり、平磯、阿字ヶ浦、磯浜、大洗などとともに一団の漁業地の中心である。その中学校にはもちろん漁業関係者の子弟も多いが、基地としての性格上、小規模な造船、加工業、商業などもかなりの比重を占め、また地域の中心でもあるので、醸造業、公務、自由業、家内工業も多い。それにくらべて平磯は、漁夫の子弟の比率が最も高いことから知られるように、漁村としての性格は相対的に明確である。この地域文化では、われわれのMPIにおける神経症尺度で評定されるような特性は低い方が普通であるという認識があるようである。そこでは、年齢の増加にともない神経症得点は高くなり、内向的にもならない。隣接する農村馬渡地区は、この文化の影響か、年齢にともなって神経症化することはなかったが、男女とも内向化の傾向がみられる。一方、那珂湊、平磯とならんで三浜にかぞえられる阿字ヶ浦は、漁業も残っているが農家が多く農村といってよい。ここでは、われわれが、浮島でみたように、年齢の増加にともなう神経症得点の増加と、男子には内向化の傾向がみられた。阿字ヶ浦に隣接する馬渡では神経

症化の傾向はなかった。馬渡は四方にひらかれており、阿字ヶ浦は、水戸、勝田、那珂湊からの街道の終点であって、農村の色彩が強まれば、海すら閉鎖性を増加させる。市毛は水戸をへて日立、平、仙台へと伸びる国道6号線と、水郡線沿線、太田線沿線と那珂湊をむすぶ街道の交叉点に位置する。ここでも神経症得点は年齢の増加に逆比例して低下した。こういうことを考えると、神経症得点が中学生において年齢とともに増加するという傾向は、農村のもつ特徴というより、閉鎖的地域のもつ特徴であるのかもしれない。ただし、上記の傾向が生じるためには閉鎖的であると同時に保守的な農村であるという条件が必要かどうかは今後の検討によらねばなるまい。

4. 要 約

MPI を用いた測定によれば、日本の大学生が、米国および英国の大学生よりも神経症傾向得点（N点）が高く、同時に外向性得点（E点）が低いということが示唆された。そこで、大学生、女子高校生、中学生（浮島）の測定結果を比較すると、N点は、大学生、女子高校生、および中学生女子はほぼ同水準で、中学生男子は低い。E点は、女子高校生は大学生より高く（外向的）、中学生（浮島）は女子高校生と同水準であった。

浮島においては、1年間隔の測定で年齢にともなう、N点の増加とE点の減少が一貫してみられた。しかし、有意差のあった変化は女子の神経症傾向点の増加、1学年の男子と2学年の女子の外向点の減少だけであった。

得点の標準偏差は中学生（浮島）では、大学生より有意にしかもずっと小さい。（ $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{3}$ ）

浮島は茨城大学文理学部心理学教室の、8年間隔の2回の調査によると、比較的閉鎖的で、内部に義理など濃密な人間関係を有する霞ヶ浦の陸島（現在陸続き）という地域の特殊性から、「消極的」な地域パーソナリティをもつといわれている。そこでこれと対照的な漁港・漁村地区でMPIを実施して比較してみた。

漁業地区ではN点は男女中学生で女子高校・大学生より低い。またE点はやや高目である。

しかし、同一地区内で農業を主とする地理的に閉鎖的な地域では、年齢にともなう神経症化と、男子においては内向化がみられた。しかし、隣接する地理的に開放的な農村では内向化の傾向はわずかにあったが、神経症化の傾向はなかった。

そこで、一応、地域の地理的閉鎖性は中学生において、神経症傾向得点が年齢に比例して増加するという現象と何らかの関連があるのではないかと考えられる。また、このことが、英米の大学生に比し、日本人大学生の神経症得点の高さを一部説明するのではないかと推論される。

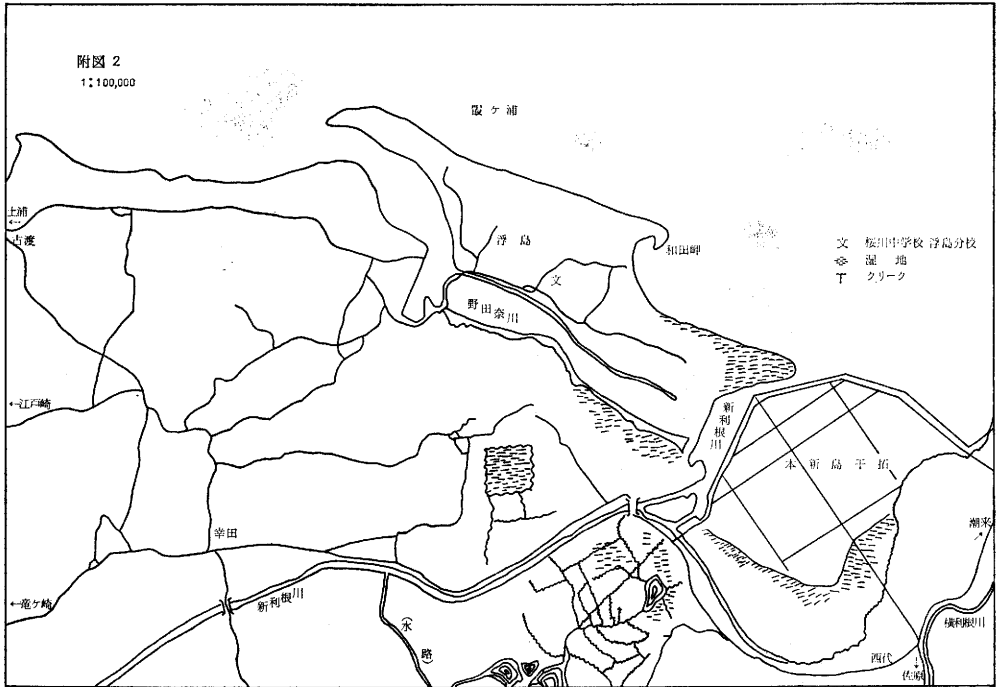
地域における平均的人格の評定（B形式）と自己評価（A形式）との関連を、漁業地区について検討した。その結果、ABの相関はE点よりN点において高いこと、N点においても、男子よりは女子が高いこと、をみた。いくつかの分析からこの相関係数の意味は自己評価が社会的規準に影響をうける程度を示すものと考えられた。

付記 浮島におけるMPI実施に協力して下さり、また本稿をまとめるにあたって助言いただいた本学助教授白幡悦子氏に謝意を表する。

註および引用文献

- (1) Sherif, M. *The psychology of social norms*, Harper, 1936.
 Cantril, H. *The psychology of social movements*, Wiley, 1941.
- (2) 大場千秋, 原始民族の実験心理学, 中和書院, 昭23年
- (3) Mead, M. *Investigation of the thought of primitive children with special reference to animism*. J.R.A.I., LXII, 1932. Hallowell (4) による。
- (4) Hallowell, A. I. *The Rorschach test as a tool for investigating cultural variables and individual differences in the study of personality in primitive societies*, *Rorschach Res. Exch.* 5, 1941, 31-34.
 Hallowell, A. I. *Acculturation processes and personality changes as indicated by the Rorschach technique*, *Rorschach Res. Exch.*, 6, 1942, 42-50.
 Cook, P. H. *The Application of the Rorschach test to a Samoan group*, *Rorschach Res. Exch.*, 6, 1942, 51-60.
 Leighton, D. & Kluckhohn, C. *Children of the people; The Navako individual and his development*, Cambridge; Harvard Univ. P. 1947.
 Spindler, G. D. *Sociocultural and Psychological Processes in Menomini Acculturation*, Univ. of California P. 1955.
 Spindler, L. & Spindler, G. D. *Male and Female adaptations in culture change*. *American Anthropologist*, 60, 1958, 217-233.
 わが国では藤岡喜愛氏らの研究がある。
- (5) Hathaway, S. R. & MacKinley, J. C. *Manual of Minnesota Multiphasic Personality Inventory, Revised*, 1951.
- (6) 佐藤 愛, MMPI の精神医学的研究, 石橋教授開講10周年記念論文 P. 19-32
- (7) Cattell, R. B., Beloff, H. & Coan, R. W. *Handbook for the IPAT High school Personality Questionnaire*, Champaign, Illinois, 1958.
- (8) 大脇義一, 菊池哲彦, 石井栄助, R. B. Cattell: HSPQ の研究, 東北心理学研究, 9号, 1960, 21-22
- (9) Eysenck, H. J. *The Questionnaire measurement of neuroticism and extraversion*, *Rivista di Psicologia*, 1956, 54, 113-140.
 Jensen, A. R. *The Maudsley Personality Inventory*. *Acta Psychologica*, 1958, 14, 314-325.
 北村晴朗, 菊池哲彦, *Maudsley Personality Inventory の諸規準値の検討*, 日本応用心理学会第27回大会論文集, p. 97, 1960
- (10) N尺度とE尺度の相関 (REN) は Eysenck によればないとされ, 内向的神経症 Dysthymia と外向的神経症 Hysteria の二分割を彼は考えている。しかし, Jensen は米国内神経症者群について-0.3の有意な相関を得, Bendig は米国内学生について-0.2の相関を, 筆者も有意な -0.23という値をえた。したがって, この質問紙で測定される内向性は神経症傾向の増加と平行して多少は強くなるものと考えてよい。
- (11) このことに関してのべている成書は夥しい。筆者の考えは次に示してある。
 北村晴朗編, 要説心理学, 昭学社, 昭42年, 第9章, 人格の精造と測定
- (12) 大宮録郎, 浮島住民のパーソナリティ——生活慣習を通して, 霞ヶ浦・北浦地域総合研究報告書 茨城県, 昭和34年, p. 47-63
 木本英人, 浮島住民のパーソナリティ——言語生活からのアプローチ, 同上書, p. 65-90

2. 浮島および主要道路



3. 那珂湊市・勝田市と主要道路

